



空と大地が広い。360度、視界を遮る人工物は何一つなく、褐色の世界が地平線まで延々と続く。モンゴル語で「乾燥した土地」を意味するゴビ。太陽が日陰のない地面を容赦なく焦がし、ラクダですら行き倒れる過酷な環境だが、太古は水をたたえ、緑に覆われた「恐竜の王国」だった。今夏、同地を舞台に岡山理科大が行った恐竜化石調査に同行した。(稲垣心也)

ゴビに行く

岡山理科大 モンゴル恐竜調査

① 足跡

4歩行動探る糸口に

新たなステージ
ゴビ砂漠で日本とモンゴルの共同調査が始まって25年になる。1993年、岡山市のバイオ企業・林原が運営する旧林原自然科学博物館が日本隊として初めて現地入りし、道を開いた。尾羽を持つノミニア、石頭恐竜アムトケフアレなど新種、プロトケラトプスの幼体集団…。世界が驚く成果を上げてきた。

「左右の足が開き、爪が外を向く」がに股。歩幅は狭く、歩行はかなり遅かった。石垣教授の声が弾んだ。「連続する4歩を鮮明に観察できる。これほど巨大で状態の良い足跡化石は世界で例がなく、教科書に載るレベルだね」



同博物館長も務めた石垣教授は「林原の『遺産』、特にモンゴルとの信頼関係があるから今がある」とかみしめる。2013年にパトンを引き継いだ理科大も、15年からフィールド調査に着手。昨秋には私立大の「ブランド化」を図る文科科学省の研究助成事業に選出され、「恐竜研究の国際的な拠点形成」を目指す、今夏の発掘には理科大生12人

大型植物食恐竜の足跡化石を発掘する調査隊。昨夏のものを含め計4歩の連続した足跡が見つかった

も参加。モンゴル側と合わせ隊員30人超と過去最大規模になった。
轍を頼って

8月11日午前8時。調査隊本隊はウランバートルを出発した。7台の車列はモンゴル中央部の街マンダルゴビを過ぎた辺りで舗装された道を外れ、轍を頼りに大草原を南下していく。
しばらくは遊牧民のゲルや家畜の群れに遭遇するが、やがて緑が少なくなり、フタコ、ブラクダや野生の馬、ガゼルが姿を見せ始める。「砂漠に入ったんだ」。ハンドルを握るIPG研究員チンゾリックさん(35)が教えてくれた。
ベースキャンプ地のシャルツァフまで直線距離で600mだが、悪路を迂回しながら進むため、走行距離は800mを超え、さらに車のパンクに加え、モンゴルでは「よくある」家畜の伝染病が発生して予定のルートを通れず、到着したのは出発から18時間後の翌12日午前2時。
応急的に、先発隊が組み立てたテントですし詰めになって眠る。まじろみの中、暗闇から学生のささやく声が聞こえた。「とんでもないところに来たな。日が昇った後で、その言葉を実感することになる。」

【本誌HPに動画掲載します】
(次回は17日付から)面に